

備えあれば憂いなし

菅野 博康



(すがの・ひろやす)
歯科医師
ICDフェロー

3・11、突然襲った想定外の大地震、2：46は午後の診療の最中で10名の患者さんが医院内においてになりました。34年前の宮城沖地震も同じように診療中で、ハイドロコロイド印象の注水を始めた途端でしたが、それほど大きな揺れを感じませんでしたので、そのままの姿勢で硬化を待つことができました。しかし、今回は宮城沖地震とは違う大きな揺れを感じ、水平位では不安定で患者さんの不安感も大きくなるため、座位の姿勢に椅子を起し、スタッフがそれぞれの患者さんの両肩に手を当てて、「このままが一番安全ですよ」と声をかけながら自分達の体の揺れによる不安定さからも身を守りました。

収まるかと思うと揺れ、もう収まるかと思うとまた揺れ、実に長い時間に感じられました。待合室の3名の患者さんは、待合室の隅に肩を寄せ合って「怖かった、こんな怖い思いは初めてだ」とおっしゃっておられました。診療室は、平屋の鉄筋コンクリート造りで基礎を強固にしてあるうえに、地盤の強固なエリアということもあってよその建物よりは揺れが少なかったものと思われ、幸いけが人もなく、器物の損壊もありませんでした。

電気、ガスが止まり電話も不通となり、地震の規模・街の状況が判らないまま患者さんにお引き取りをいただき、スタッフを帰宅させました。公共交通機関が運休のため、徒歩による移動しかなく、3月には珍しい冷たい雪の中を黙々と歩く人の流れは、かつて見たことのない異様な光景でした。

自宅は木造2階建てで、地盤もそれほど強固なエリアではなかったため揺れが大きかったのでしょうか、室内の漆喰壁に大きな亀裂が入り飾り棚の飾り物と本棚の本が飛び出しておりました。絶え間なく来る余震の怖さもあり、近くの中学校の体育館の避難所に防寒衣を着こんで、帰宅できなかったスタッフを含め6名で避難しました。広い体育館は近隣の方々ではほぼ埋め尽くされており、4か所に置かれた石油ストーブは温かそうな赤い炎を見せておりました。しかし、自由に出入りできるように大きな扉は解放されており、冷気は遠慮なく館内に入り込み、天井の高い体育館での石油ストーブは無いに等しいものでした。

夕飯に冷たい混ぜご飯と冷たいお茶をいただき、体

を丸めて無言のまま口に運びましたが、これを準備してくれた方々も同じように被災されていることを考えると頭の下がる思いでした。しばらく避難所にいましたが、深々と迫る冷気の中で一夜を過ごしては、間違いなく風邪をひいてしまいそうで、余震の怖さはありましたが自宅に戻り、洋服を着たままベッドで休むことにしました。絶え間なく襲う余震、一晩で百数十回もあったということで揺れ通し揺れていた感じがしました。

電気、ガス、灯油を熱源とした料理、給湯、暖房です。日常生活を日常的に送ることができない生活が始まりました。幸い、水道は止まらず、電気も2日後には通電し、ガス、灯油、ガソリンを待つだけで不自由度は半減しました。しかし、テレビを見て地震の

規模の大きさ被害の甚大さ、それに加えて想像を超える津波の大きさと破壊力に言葉もありませんでした。道路一つ隔てた海岸側は全く別の風景で、以前の面影はどこにも残っておりませんでした。

物流が止まり、今あるもので生活をしなければならぬ状態がいつまで続くのか、情報のないままの非日常の始まりでした。食料、水、ガス、灯油、ガソリンの備蓄が3日分では足りないのか、1週間分なら十分なのかは誰もわかりません。季節や時間帯によって状況は全く違ったものになることを考え、心の備えを万全にし、まさかの時にパニックにならないよう、冷静な状況判断をして行動することを心掛けておくことが、最高の備えではないかと思いました。